

全水100周年を迎え、考えること⑮

「上からの近代化」が「米騒動」・部落問題を残した

1. 「米騒動」はなぜ起こったか

米騒動には近世・明治のそれもあるので、有名な第一次大戦末のそれは「出兵が始まった」といつまで「米騒動」と表す。「米騒動」の原因は、「大戦景気のため一九一七年以来米価・物価高」になっているところへ、「シベリア出兵が始まったため」と謂われて

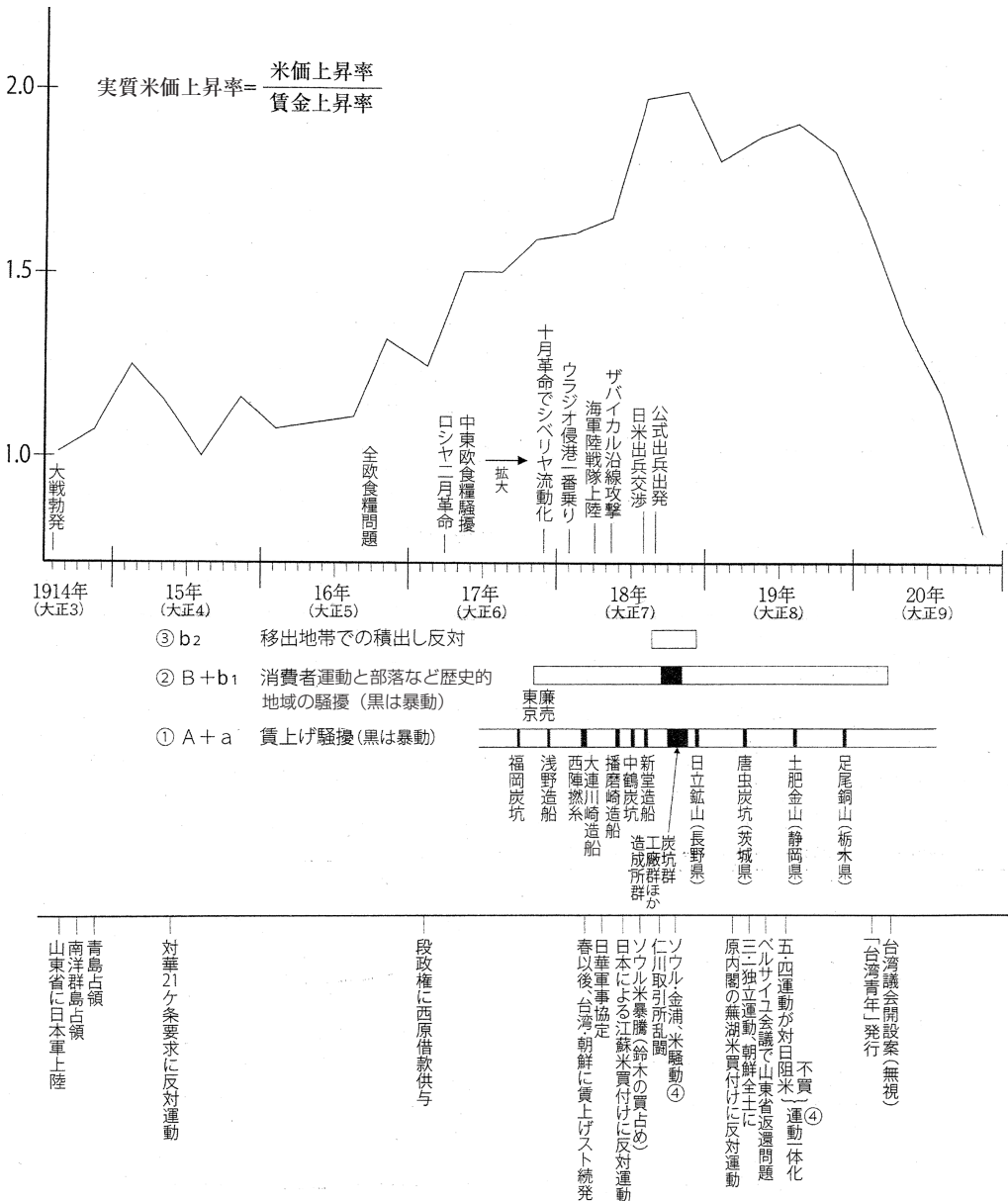
アでの軍用米は全て植民地朝鮮から運び出したので、兵士が食べる筈だった分だけ本土には余裕が生じていたのである。したがってこの時の米価奔騰は「それ、こんどは戦争」という純粹に投機的なもの、つまり既に一七年春以来騰貴していた

載っている二階建て米価騰貴である。その一階部分である一七年春以来「大戦景気のため物価・米価高になった」と言われて来たことに、二つの重要な事態が隠されている。一つは、第一次大戦がそれまでの植民地化戦争や日露戦争と対照的に、世界の工業生産力の中心だった欧州列強自身

た。「急成長を遂げた綿糸紡績」でも「必要とする紡績機械をもっぱらイギリスから輸入していた」。他の諸部門でも機械輸入が続いていたことを内田星美^{※2}が具体的に詳述している。そしてこの機械輸入が大戦で途絶することで設備投資に困難が生じていた事が高橋亀吉^{※3}によって指摘され、橋本寿朗によって大戦期経済の構造的特徴をなす投資制約問題として明確・総合的に把握^{※4}された。「欧米からの輸入困難という条件下で……その象徴は鉄不足、

製造機を輸入に頼り続けて来た産業革命の移植性とともに、「上からの近代化」だった故に残っていた旧構造に他ならない。したがってそれで生じた米価・物価騰貴に対して全勤労者が立ち上がった「米騒動」は、幕末以来の外圧の下余儀なくされた「上からの近代化」を、

その外圧が最大限後退した欧州大戦期に「下からの近代化」で補完する市民戦期としての意味を持っていたのである。維新期と「米騒動期」とは、そのような内的必然性で繋がっていたのである。



米騒動史研究会世話人 井本 三夫

場から手を抜いたために、米日(や後発近代化国)が未曾有の輸出ブームになり、一九世紀後半以来の外圧が最大限後退したことである。そして二つめは、それによる未曾有の貿易黒字が日本では金余りに転じ、投機横行を招いたことである。何故であろう？

それを使って拡大再生産して国内需要に応えうることに、米の輸入にも使える筈である。したがって其れ等が出来なかった理由を指摘せねばならない。石井寛治^{※1}はこう書いている。「日

本は急成長を遂げた綿糸紡績」でも「必要とする紡績機械をもっぱらイギリスから輸入していた」。他の諸部門でも機械輸入が続いていたことを内田星美^{※2}が具体的に詳述している。そしてこの機械輸入が大戦で途絶することで設備投資に困難が生じていた事が高橋亀吉^{※3}によって指摘され、橋本寿朗によって大戦期経済の構造的特徴をなす投資制約問題として明確・総合的に把握^{※4}された。「欧米からの輸入困難という条件下で……その象徴は鉄不足、

電力不足、染料不足等の供給の隘路が生じたことであつた。なかでも鉄不足……は造船業に大きな制約となった。「こうした設備投資制約下の発展というのが大戦期の特徴となるが、それは……激しいインフレの要因である」。

一方、農業では生産額の半ばにも達する小作料を、しかも現物で取り上げる前近代的な地主制が続いており、取り上げた小作米を出来るだけ高く売れるよう、地主層が政府に關税で米の輸入を抑えさせていた。これは、

や旦那寺の記載の仕方で見えて判った。しかも旧支配層が一時賜金や金録公債を交付され、士族授産などでも国家補償されているのと対照的に、部落民は平民編入で皮革業特権や減免措置を失ったこと何の行政補償もされなかったのである。

こうして被差別部落民は、最も過酷な条件に置かれた勤労層であつたから、「米騒動」で最も果敢に戦った層の一つが部落民であつたことは当然であり、亦そうであればこそ政府・権力側は一般勤労者との分断を策し、差別的弾圧・差別的裁判を行ったのであつた。

(3面に註、次号に続く)